

夏 蛍

-2007.11.12-

希望の象徴である青い空が、こんなに深い悲しみと一緒にあったとは。南国の鹿児島知覧の青空は限りなく青くそして辛い空であった。

サツマイモがずっと植えられ、緑が深くおだやかな南国の知覧市に二度と若者にこのような思いをさせてはならないと全国の遺族を回り、集められた遺書が展示されている。

集められたどの遺書も最後の一文字まで乱れることのない。一単語に決意を溜め込んだもの、ご尊父、ご母堂に今まで育ててくれた感謝を、そして兄弟一人ひとりに気を配り、自分の分までお母さんお父さんを大切に「後は頼む」と死を受け入れた決意のもの。

わたしが一番心を打たれたのは、一緒に暮らしているときは一度も継母に「おかあさん」と呼べなかった、死を前にして今までの親不孝をわびながら「初めてお母さんと呼ばさせていただきます」と「お母さん」と連記しながらお詫びし、いつまでもお元気でと親子の絆を伝えたもの。

わたし自体、わずかな燃料で爆弾を乗せ敵艦へ自らの命をかえりまず、突撃していく特攻隊のことは知らないわけではない。しかしその戦闘機に乗って突入していく若い日本人の心根をじかに触れることはなかった。

明日出撃が言い渡され、一晩中屋根の低い三角兵舎で泣き声を殺しながら、泣き続けた若者は多く、そんな若者のほとんどが、凜として一転の曇りのない真顔で二度とかえらない飛行に旅たつて行った。と記された兵舎では、幾重にも身体に奮いが走り、隣の慰霊碑の前でずっと手をあわ

せていた。

ジーパンからお尻がはみ出した若い女性たちが、遺書の前でハンカチで目頭を押さえながら一人ひとりの最後の決意を読み続けておられたのが印象的だった。

「父母を思い 一途に散り行く 桜花 きみに届けよ 夏蚩」 星辰